

タイトル：府中と立川

都下の百草という地に移り住んで13年になる。百草園という割と手軽でひなびた庭園が近くにあり、春秋には足を運ぶことも多い。隣には百草八幡宮という神社があり、鎌倉時代の遺物が残っている。

東へ3kmほど行くと鎌倉街道にぶつかる。近所の歴史の先生によると、この辺りから鎌倉街道へ至る丘の一带に真慈悲寺という巨大な寺があったそうだ。鎌倉時代には今の高野山のような山寺であったと聞き、たいへん興味深く思った。

手近にある歴史の本を開いてみる。わが家の近くを通っている鎌倉街道は、鎌倉街道上道(または信濃道)と呼ばれる幹線で、鎌倉－大船－二俣川－長津田－町田－乞田－関戸－府中－国分寺－所沢－入間川－笛吹峠－安中－碓氷峠－信濃追分と続いていたらしい。

ちなみに中道(または奥州道)は鎌倉－溝口－渋谷－池袋－川口－春日部－杉戸－古河－小山－宇都宮－白河から奥州へと、また下道は房総あるいは常総街道と呼ばれ、鎌倉－金沢－弘明寺－丸子－池上－高輪－浅草－市川から安房、鹿島神宮へと続いていた。

これら幹線に無数の支線が走り、鎌倉時代を支えていたようである。

奈良時代の日本では、各国の中心に国府をおき、それらを幹線道路でつないだ。そして、国府には国司を配し、彼らを数年ごとに交代させることで、朝廷は日本全国に対する力を保持していたといわれる。

鎌倉街道の幹線、支線を見ていると、街道は国府をつなぐ形で形成されており、この国府の世界が色濃く残っていることがよくわかる。鎌倉時代から戦国時代に至る数百年間、塩、米、鉄といった主要な産物がこれらの街道を往来し、歴史を左右する戦いもこれらの街道を舞台に展開された。

奈良も京都も鎌倉も、そして江戸も、およそ「何かの産地」ではなかったが、それぞれの時代を通じて、街道の中心を成していた。

これらの街道上には、駅、寺、宿などが点在し、主要な情報が飛び交い、それぞれの時代を築いていた。鎌倉時代には、旧来の京都と国府を結ぶ制度や仕組みの中に、鎌倉へ向かって流れる制度や仕組みが築かれ、関東、東北の興隆を望む勢力の支持を得ていたようだ。

「都市の興隆」につれ、街道をめぐる流れも変化する。江戸時代、鎌倉はもはや中心ではなく、江戸へと向かう東海道、中山道、甲州道などが幹線として流れていた。

一方、街道は人、物、金、情報を流す手段でもある。時として、この手段の革新的変化が都市の興隆を左右する場合がある。

武蔵国の国府であり、かつて鎌倉街道上道の主要都市であった府中は、その後、江戸時代を通じて、甲州道上の主要都市であった。しかし、武蔵国の中心として1000年以上の歴史をもつ大都市であり続けた府中は、明治の半ばにかつての地位からそれ始める。

当時、黒煙をはく環境破壊者、汽車が走り始め、新たな街道として、鉄道網が全国に張りめぐられ始めていた。甲武鉄道(後の中央本線)は当初、府中を通るはずであったらしいが、環境悪化と火事、騒音、そして特権の崩壊を嫌った地元民の猛反対にあう。

「甲州道沿いの府中で大反対にあい、青梅街道沿いの田無村では立入禁止にあい」「結果甲武鉄道は街道を大きくそれ、中野から立川まで武蔵野の雑木林を西に向かって一直線にのび」、中心となる駅は「甲州道沿いの一閑村、日野宿への（多摩川の）渡船場として知られているにすぎなかった柴崎村（立川村）」（『立川市史』）につくられたといわれる。

以来100年、途中、府中は、京王本線開通時にもう一度チャンスを与えられたが、駅は大国魂神社の脇につくられ、中心街であった府中本町はローカル駅となった。

よみがえった町もある。仙台の北方、仙北平野は米の一大産地である。江戸時代の中心地は、水運の中心、古川であった。明治に入り、東北本線は古川を外れ、10kmほど離れた小牛田の町を通る。古川は長い間、遠方の人の見知らぬ町となったが、つい最近、15年ほどのうちによみがえった。東北新幹線と東北自動車道が、その駅とインターを小牛田ではなく、古川につくったのである。古川と小牛田の関係は、江戸時代に戻った。

いくつもある「変革の時代」のなかで、明治の半ばは、「政治、経済の流れの変革」と「人、物、金、情報の流通手段の変革」が同時に起こった時代である。

先ごろNHKで「山形県令、三島通庸」という番組があったが、そんな時代を垣間見させてくれた。時の政府の意向を受けた三島通庸（薩摩出身で山形県令、福島県令を務めた）は、「人、相、往来し、物、相、流通すべし」として、強引に鉄道と道路を建設していった。自由民権論者は大反対し、毀誉褒貶の激しい人物として描かれている。

こんな時代には、大きな既得権益の変動がつきものであり、主役交代が随所で生じる。その範囲は、政治、経済、文化の全局面に及ぶようである。そして、既得権をもつ土着の大物たちはほとんど例外なく反対の側にまわり、その後数十年のうちに没落し、新興勢力にとってかわられている。

われわれの周囲を改めてながめると、将来振り返ってみる現代は、＜世界規模の「流れの変革」と「手段の変革」が同時に起きていた時代＞といわれるように思われる。

冷戦後の「流れの変革」は今更いうまでもない。一方の「手段の変革」は、多様化した交通手段に加え、情報通信と、その上に実現されつつある流通の仕組みと相まって、「新たな街道」を随所につくりつつある。

鎌倉街道、中央本線、府中、立川の歴史をたどると、ふと、日本の世界的な地位の100年後が気にかかる。府中、立川、どちらがその姿なのだろうか。

（1993年：桑折雅嗣）